

新島迪夫著「口腔組織学 口腔編」について

阿部 達彦¹⁾, 秋本 和宏²⁾¹⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面解剖学分野, ²⁾武蔵野市開業

松風陶歯製造株式会社創立25周年記念事業の一環として企画された「最新歯科学全書」の第1巻である「口腔組織学」は、昭和24年4月10日に永末書店より発行された。この書の企画における特徴については、第40回日本歯科医史学会（平成24年10月）において発表した¹⁾が、時間の都合により本文内容の詳細についての検討には至らなかった。また、この書は口腔編と歯牙編の二部構成からなっており、今回は特に口腔編について検討を行った。

口腔編の著者は新島迪夫、元東京医科歯科大学教授である。昭和24年4月の発行に先駆けて「口腔組織学 口腔編（第一分冊）」が発行されており、昭和25年4月の再版時に若干の改訂が加えられたとされているものの、レイアウト等を除きその内容にほとんど訂正箇所は見られない。以下の記載については昭和32年4月1日出された8刷について解析を試みた結果を記す。

口腔編は目次（2頁）、本文（48頁）、附図（7頁）、索引（5頁）からなり、本文は以下のような章題を付した3章より構成されていた。すなわち、第1章「総論」、第2章「口腔壁各部の構造」、第3章「顔と口腔の発生」、であった。また、「附図」には14枚の組織写真が掲載されていた。「まえがき」によると41図中18図は「先人の業績から引用」で、残りを「著者の原図」であるとされており、ここでいう図とは本文中の模型図および「附図」の14枚の写真の意味していた。

第1章「総論」は2節構成で、第1節では中空性臓器の一般論を示し、口腔の形態を中空性臓器の特殊化された延長として解説していた。また第2節では口腔粘膜に焦点を当てた記載を行っていた。

第2章「口腔壁各部の構造」は、「口唇」、「頬」、「口蓋」、「舌」、「口腔腺」、「リンパ咽頭環」、「鼻腔と副鼻腔」、「顎骨」と8節に分けて構成され、詳細な組織学的検討、解説を行っていた。本書における所見等については、特に引用のことがわりがない限り、新島自身が観察したであろう文体で記され、教科書の記述というよりも論文でみられる観察所見に近い体裁となっていた。このようなスタイルは、藤田恒太郎の「歯牙組織学」（昭和12年、金原商店刊）にも通じている印象を受けた。

第3章「顔と口腔の発生」も8節の構成であり、他の章とは異なり第1節に「概説」が設けられていた。以下、「顔の発生」、「口蓋の形成」、「口腔およびその附近の奇形」、「口唇の発生」、「舌の発生」、「顎骨の発生」、「副鼻腔の発生」となり、既述の2章とは趣が異なり新島の観察所見はあまりみられなかった。

本書口腔編を、第1章と第2章を合わせた組織学と第3章の発生学に大別してみると、双方とも総論（約15.4%）と7～8節の各論（11.3%）となり、非常に均衡のとれた構成であった。特に分量を多く割いている項目は、組織学では「口腔腺」（37.9%）、発生学では「顔の発生」（23.5%）であった。本書は図譜としての性格も強く、特に口腔腺の項には参照図の指定（口腔編での総数は56個）が16個もあり、かなり詳細に図を用いた解説をしていた。この項では引用図も多く、緒方知三郎（東京帝国大学病理）の線條部の構造を示す模式図を引用しつつ唾液腺ホルモンについてふれるなどの工夫があった。また、多くの図を用いるという点では、組織学での「舌」の項も顕著で、分量に比して参照図が11個と多く指定されており、口腔腺、舌ともに詳細な研究がすすめられていたことが推定された。

まえがきによると本書は既に組織学一般の知識を有する学生を対象としており、それは「歯科教育の授業の方針は講義はなるべく総論的なものとどめて、実習に主力を注ぐ」という審議会のとりきめがあったという。本書は、歯科の新しい教育指針に対する新島教授法ともいべきひとつの回答であり、顕微鏡実習時の座右の書としての性格が反映されているものと思われる。